

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 10 日現在

機関番号：34310

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25360027

研究課題名(和文) アメリカの国立エスニック博物館の設立過程に見られる政治性の比較研究

研究課題名(英文) Comparative Analysis of the Politics of Establishing National Ethnic Museums in the United States

研究代表者

落合 明子(Ochiai, Akiko)

同志社大学・グローバル地域文化学部・教授

研究者番号：30264831

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、国立アメリカン・インディアン博物館(1989年法案成立、2004年開館)と国立アフリカ系アメリカ人歴史文化博物館(2003年法案成立、2016年9月開館予定)の設立法案の審議過程に注目し、マイノリティ集団と主流社会の間で展開される公的記憶を巡る攻防の一端を明らかにした。審議時の社会状況や建設地の有無など物理的な制約の影響も明らかにしつつ、アメリカ先住民とアフリカ系アメリカ人の博物館推進者が、どのようにアメリカの「国民物語」に再編を迫り、それぞれの法案が可決成立したのかを示した。また、こうした比較考察を通じて、「二大マイノリティ集団」としての共通性およびそれぞれの特異性を抽出した。

研究成果の概要(英文)： This research examined political contests over public memory between minorities and the main society, by focusing on the establishment of the National Museum of the American Indian (enacted in 1989, opened in 2004) and that of the National Museum of African American History and Culture (enacted in 2003, opening in 2016). Considering historical contexts as well as environmental and congressional factors such as museum sites and the seniority system, this research shows how Native American and African American museum advocates tried to establish officially authorized “national” ethnic museums and recreate the “American Story.” In doing so, this research also clarifies the similarities and differences of both groups as the two major American minorities.

研究分野：アメリカ合衆国史

キーワード：国立エスニック博物館 アメリカ先住民 アフリカ系アメリカ人 博物館と文化ポリティクス 「国民物語」の再編

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、アメリカ合衆国（以下「アメリカ」）において奴隷制が廃止され、社会の再編が試みられた南北戦争・再建期について、解放奴隷を中心としたアフリカ系アメリカ人の視点から、長年にわたり研究してきた。研究を進めるにつれて、奴隷制時代や南北戦争・再建期のアフリカ系アメリカ人の動向を、後世の人々や国家がどのように「記憶」してきたのかという、記憶構築の政治性に関心を抱くようになった。マイノリティ集団に関連した記憶の構築およびそれを巡って国家（主流社会）とマイノリティ集団の間で展開される攻防は、マイノリティ集団によるアイデンティティ形成に大きな影響を及ぼすだけではなく、そのマイノリティ集団の社会的な地位をも左右する非常に政治性の高いものであることは、20世紀末に記憶研究が台頭して以来、指摘されて久しい。こうした記憶を巡る攻防は、連邦議会における記念碑設立のための法案審議から、教科書における歴史記述、映画における描写等、様々なことを巡り展開され、それらを扱った研究が数多く発表されている。

以上のような研究動向および研究代表者自身の関心から、10年程前から歴史系博物館における奴隷制の展示を巡る問題について研究するようになった。奴隷制は、アメリカ人の間でその記憶を巡っていまだに論争が絶えず、現在の人種問題にも影響を与えることが多い「負の歴史」である。そこで、アメリカの歴史系博物館の設立や運営、展示・教育プログラムの開発等において、奴隷制（人種）がどのような影響を及ぼしているのかを検討した。歴史系博物館を、(1)国家の立場を代弁する博物館、(2)伝統的に白人が運営してきた博物館、(3)アフリカ系アメリカ人の主張を代弁する形で発達してきた博物館に分類し、その代表例として(1)では国立アフリカ系アメリカ人歴史文化博物館およびハーバース・フェリー国立歴史公園、(2)ではコロニアル・ウィリアムズバーグ、(3)ではチャールズ・H・ライト黒人史博物館を取り上げた。

これら4館の調査を通じて、20世紀後半以降、いずれの博物館においても奴隷制を取り入れた展示や教育プログラムが拡充され、歴史系博物館における「記憶の民主化」が着実に進行していることが分かった。その一方で、博物館設立時の趣意やその後の経緯等も、それぞれの現在のあり方に影響を及ぼしていることが明らかになった。さらに、奴隷制を巡るアメリカの世論や学術研究の変遷、つまり人々の刻んできた奴隷制の記憶が変化してきた過程を見学者にいかに関与するかという課題を、程度の差こそあれ、どの博物館も抱えていることが浮き彫りになった。

こうした考察結果を踏まえて、かつて白人支配層が構築した「国民物語」を称揚する「殿

堂」として各地の歴史系博物館を主導し、現在では「記憶の民主化」を図りつつある国立の歴史系博物館の行方は、今後の博物館全般の方向性を左右するものであると、研究代表者はあらためて認識するに至った。また、アフリカ系アメリカ人と同様に「負の歴史」を背負わされ、「国民物語」の再編を迫っているアメリカ先住民と、彼らの博物館との関係にも関心を抱くようになった。以上が、国立アメリカ・インディアン博物館（1989年設立法案成立、2004年開館）と国立アフリカ系アメリカ人歴史文化博物館（2003年設立法案成立、2016年9月開館予定）を中心に据えた国立エスニック博物館の比較研究を構想するに至った経緯である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、国立アメリカ・インディアン博物館ならびに国立アフリカ系アメリカ人歴史文化博物館の設立法案可決までの過程に注目し、それぞれの推進者がどのようなポリティクスを駆使したことで博物館が実現したのか、その際にマイノリティの歴史や文化を「国民物語」にどのように組み込もうとしたのかを比較検討することであった。加えて、ラティーノや他のマイノリティ集団による最近の国立エスニック博物館設立運動も考察対象に入れること通じて、「国民」の境界を巡る攻防におけるマイノリティとしての共通性、および各集団の特殊性の抽出を目指した。

このような研究目的を設定した背景には、以下のような先行研究の動向や研究を遂行する意義がある。第一に、国立エスニック博物館は、正統ポリティクスと文化ポリティクスの接点および「国民物語」とマイノリティ集団の関係の象徴として、非常に興味深い研究対象であるにもかかわらず、従来は、展示の表象分析や民族誌学的な研究が中心であった。本研究は、こうした先行研究の盲点を補うべく展示以外の博物館の政治性に注目し、歴史的な文脈から考察するものである。第二に、先行研究では特定のエスニック集団に焦点を当てた博物館のみを調査対象とする研究が殆どであったことがある。そうした現状に対して、複数のマイノリティ集団による国立エスニック博物館設立運動を比較することの意義は大きいと考え、各集団の運動の特徴を明らかにし、アメリカ社会とマイノリティ集団の関係のダイナミズムをより鳥瞰的な視点から考察することを目指した。第三に、多文化共生社会の実現に向けてより民主的な記憶の再構築を促す「装置」として博物館が果たしうる役割を探ることもつながると考え、本研究の課題を設定した。

3. 研究の方法

本研究は、(1)アメリカのマイノリティ集団

と博物館の関係についての基礎情報の収集と課題の整理、(2)アメリカ先住民およびアフリカ系アメリカ人による国立エスニック博物館設立運動と設立法案の審議過程の比較検討、(3)ラティーノや他のマイノリティ集団による国立エスニック博物館設立運動の検討、(4)総括として、マイノリティ集団による国立エスニック博物館設立運動の共通性と特殊性の整理およびこうした博物館の存在意義の検討、に分けられる。なお、研究を開始した当初は 2015 年秋の予定であった国立アフリカ系アメリカ人歴史文化博物館の開館が 2016 年 9 月に延期されたため、展示・教育プログラムの検討を研究期間内に行うことはできなかった。

(1)は、3 カ年にわたる研究期間の初年度であった 2013 年度と 2014 年に主に行った。具体的には、国立アメリカ・インディアン博物館と国立アフリカ系アメリカ人歴史文化博物館の設立の背景として、マイノリティ集団と博物館の関係を歴史的な文脈に位置づける基礎的な調査を中心に行った。(2)については 2013 年度に資料収集を始めたが、2014 年度から本格的に着手した。特に研究代表者自身に研究蓄積のなかった国立アメリカ・インディアン博物館については、当時の連邦議会資料や新聞記事等を利用して情報を整理し、大まかな流れの把握に努めた。日本で入手困難な公聴会や推進者(団体)の資料等は、スミソニアン博物館付属の図書館、米国議会図書館、ミシガン大学図書館などに赴いて収集した。なお、2013 年度には、国立アメリカ・インディアン博物館と国立アフリカ系アメリカ人歴史文化博物館の関係者にインタビューをし、それぞれの博物館の活動内容や課題について伺った。後者の博物館については建設中の現場にも案内してもらい、建物の設計や展示計画も伺った。2014 年度には、ニューヨーク市にある国立アメリカ・インディアン博物館の分館(ジョージ・グスタフ・ヘイ・センター)を訪問した。

(3)は、主たる考察である(2)の補足的な作業と当初から位置づけていたが、国立アメリカン・ラティーノ博物館推進運動と国立アメリカ人博物館推進運動の双方とも本研究の開始時から予想よりも進展がなかった。運動推進団体にも面会を試みたが、前者の団体は何度もコンタクトを試みたが、返事を頂くことができなかった。後者とは都合がつかずメールでのやりとりに留まった。そのため、この2つの博物館推進運動に関しては、新聞や雑誌の記事、議会資料、ネット上の情報を中心に調査を進めた。

最終年度の 2015 年度には(4)の作業に入り、前年度までに入手した情報や分析の成果をフィードバックしつつ、国立アメリカ・インディアン博物館と国立アフリカ系アメリカ人歴史文化博物館を比較する論点をより明確化した。2015 年度の後半には、博物館構想の浮上からそれぞれの設立法が成立に至る

までの過程を段階的に比較しながら、先住民とアフリカ系アメリカ人のマイノリティ集団としての共通性およびそれぞれの特殊性を整理した。その後、国立アメリカン・ラティーノ博物館推進運動などの新しい動きも追うことで、「国民物語」の再編や最近の多文化主義の動向、多文化共生社会の実現に向けて博物館が果たしうる役割の総括的な考察を行った。

4. 研究成果

(1)マイノリティ集団と主流博物館の関係

20 世紀半ばまで、マイノリティの人々は実社会だけではなく、白人が支配した主流の博物館においてもその存在を無視・歪曲されてきた。従来の主流博物館は、白人支配層が構築した「国民物語」を称揚する「殿堂」としての役割を果たす一方で、マイノリティにまったく言及しないか、「劣等」・「野蛮」なイメージを想起させる展示を行ってきたからである。例えば、滅びつつある「高貴なる野蛮人」とされたアメリカ先住民に関連する文化的遺物は、人骨や埋葬品を含め、動物のはく製などと共に自然史博物館に展示された。その一方で、西部のフロンティア開拓と表裏一体をなす先住民の虐殺や土地略奪の歴史に主流博物館は言及しないか、文明の「進歩」としてそれらの行為を正当化した。アフリカ系アメリカ人の場合も、実社会で「二級市民」扱いされ、「見えない存在」であったことを反映し、主流博物館が彼らの歴史や文化を展示・解説することは稀であった。言い換えれば、「奴隷＝動産」としてアフリカから連行された人々の子孫が多数を占めた彼らは、あくまでも「労働力」であり、展示の対象にすらならなかったのである。こうした中、マイノリティ集団は細々ながらも自らの手で歴史や文化を維持・保存してきた。

20 世紀半ばに起こった公民権運動を皮切りにマイノリティ集団が権利拡張運動を起こすと、博物館を取り巻く情勢も大きく変化する。権利拡張運動の一環として、マイノリティ集団は自分たちの歴史文化に特化したエスニック博物館をコミュニティ内に建設した(先住民の場合は、「部族博物館」と呼ばれることが多い)。加えて、マイノリティ集団は、主流博物館にも修正も迫った。その結果、主流博物館も徐々に変化していった。例えば、スミソニアン協会は 1980 年代後半に、マイノリティ関連の展示や職員の雇用において偏りがあったことを認め、多文化主義の方向に運営方針を大きく転換した。ほぼ同時期に、権威主義的に解釈を教示する博物館のあり方にも批判が起こり、見学者の参加を促す「フォーラム」の機能が重視されるようになった。この変化も、主流博物館がマイノリティ集団側の主張に耳を傾けるようになる契機となった。以上のマイノリティ集団と

主流博物館の歴史的な関係および最近の動向について考察した成果の一部は、「国立エスニック博物館 国家の中心でマイノリティが『アメリカ』を語るディレンマ」として刊行した。

(2)アメリカ先住民とアフリカ系アメリカ人による国立エスニック博物館設立運動と設立法案の比較

20世紀後半にマイノリティ集団と主流博物館の関係は大きく変化したが、国立博物館が国の歴史文化の粋を集めた「殿堂」であることには依然変わりなかった。さらに、マイノリティ集団にとって、国立博物館は自分たちの社会的地位の向上ばかりか、「負の歴史」に対する国の姿勢を示す象徴的な場でもあった。こうしたことから、特に1980年代後半以降、アメリカ先住民やアフリカ系アメリカ人の間では、既存の国立博物館の改革を求める声に加え、自らの歴史文化に特化した国立エスニック博物館の建設を求める声が大きくなった。先住民とアフリカ系アメリカ人に特化した国立エスニック博物館を建設するための設立法案は、それぞれ1988年、1989年とほぼ同時期に初提出された。しかし、前者が2年余りで可決成立したのに対して、後者は同時期には成立に至らず、10年近くも審議が停滞した後、2003年によようやく可決成立した。そのため、国立アメリカ・インディアン博物館は2004年に開館したが、国立アフリカ系アメリカ人歴史文化博物館の方は現在も建設中で、開館が遅れている。こうした違いを探るために、両集団が国家レベルの博物館を求めるようになった経緯から、それぞれの設立法案が提出され、成立/不成立となった1980年後半から90年代初頭の経緯を、公聴会記録、関係者による証言、当時の新聞報道などを用いて法案審議を丹念に調査した。

比較考察の結果、国立エスニック博物館構想が打ち出される以前から先住民関連では膨大なコレクションが存在し、建設候補地の確保も比較的容易であったこと、連邦上院にインディアン問題委員会という専門委員会が存在し、その委員長としてダニエル・イノウエ議員が政治的な手腕を発揮し、先住民推進者が団結して動いたこと、連邦政府と部族政府の信託関係に基づき、「先住民」は特殊な政治的地位を保障されていたこと等から、国立アメリカ・インディアン博物館設立法案の方が全体的に可決に有利な条件を有していたことが明らかになった。からについて逆に言えば、アフリカ系アメリカ人の国立エスニック博物館構想では、独立博物館での展示に値するののかという疑念がスミソニアン協会等から上がった上に、建設候補地の選定が難航したこと、建設候補地を含め、博物館構想を巡ってアフリカ系アメリカ人の推進者の足並みが揃わなかったこ

と、1990年代に入り「文化戦争」が激化しただけでなく国家財政も悪化し、建設反対の声が強くなったこと等が博物館の設立法案の審議に不利に働いた。

さらに、国立アメリカ・インディアン博物館の設立法案が、スミソニアン協会が所蔵していた先住民の人骨の返還問題と並行して審議されたことも、同法案の可決にプラスに働いた。先住民が人骨所蔵を人権侵害と非難し、その延長線上で文化的自治を行使しうる「インディアン・プレイス」として国立博物館の設立を推進し、世論もそうした先住民の主張を支持したからである。これに対して、アフリカ系アメリカ人による国立エスニック博物館の設立運動は分離主義と捉えられる傾向にあり、白人の賛同者を増やすことができなかった。こうした研究成果の一部は、論文「国立アメリカ・インディアン博物館設立法成立の背景 国立黒人博物館設立法案との比較から」として刊行した。なお、2000年以降に経済が好転し、アメリカ同時多発テロ事件以降に愛国主義が高揚する中で、国立アフリカ系アメリカ人歴史文化博物館は人種が「和解する場」となると推された結果、アフリカ系アメリカ人以外にも支持層が拡大し、同博物館の設立法案が可決成立した。

(3)ラティーノ等による国立エスニック博物館設立推進の動き

国立アフリカ系アメリカ人歴史文化博物館の設立法案が可決成立した2003年以降、ラティーノ議員が国立アメリカン・ラティーノ博物館の設立に向けた調査委員会の設置を求める法案を断続的に提出した。その結果、2007年に大統領諮問委員会の設置が決まり、2009年に実際に委員会が立ち上げられた。2011年には、ラティーノに特化した国立エスニック博物館建設の重要性を強調した報告書が出版された。しかしながら、報告書に示された建設候補地や資金調達方法の実効性に対して批判が上がった。さらに、同博物館の推進者が過去500年にわたるラティーノのアメリカ社会への貢献を主張したのに対して、「ラティーノとは誰なのか」、その人々に特化した独立博物館が本当に必要なのかという批判も上がった。その後も同博物館の設立法案は継続的に提出され続けているが、国立エスニック博物館の建設に総じて批判的な共和党が上下両院の多数を占めている現在の連邦議会の勢力図からすれば、設立法案が連邦議会の本会議に上程される可能性は低いと考えられる。

他方、個々のマイノリティ集団の足跡を尊重しつつも、「国民物語」を総合的に語る場として国立エスニック博物館を求める動きもある(国立アメリカ人博物館設立運動)。2011年と2013年には、博物館設立に向けて調査を行う大統領諮問委員会の設置を求める決議が提出された。数多くのエスニック集

団を合わせて展示する形態を掲げる同博物館の構想に、アジア系やヨーロッパ系などのマイノリティ団体だけでなく（2016年1月時点で180団体）、学界や政界からも支持の声が上がっている。しかし、「多から一」を體現するとしながらも、同博物館がどのような「国民物語」を提示するのかは現時点では必ずしも明瞭ではない。さらに、中東情勢が悪化する中で、今後「移民国家アメリカ」がどの方向に進むべきなのかを巡って、共和党大統領候補のドナルド・トランプの躍進が示すように、アメリカ世論は二分している。こうした状況下において、国立アメリカ人博物館の実現にはまだ多くの時間を要するものと思われる。以上の最近の2つの運動については今後の動向も注視し、将来的には推進団体とコンタクトを重ね、研究を深めたいと考えている。

(4)総括 - 国立エスニック博物館設立運動に見られる共通性と特殊性、博物館の意義 -

20世紀半ばに台頭したマイノリティ集団による権利拡張運動を経た1980年代後半に、アメリカ先住民とアフリカ系アメリカ人は、それぞれの集団に特化した国立エスニック博物館が首都ワシントンに建設されることを求めた。双方共に、自らの歴史や文化を語る国家公認の場を首都の中心地に獲得することで、自分たちのアメリカにおける社会的地位の向上を示そうとしただけでなく、国に対して「負の歴史」への対峙を迫った。こうしたマイノリティ集団側の主張に見られた共通点に加え、主流派の反応においても、共通点が見られた。例えば、スミソニアン協会はマイノリティ集団がエスニック博物館運営において主導権を握ることに難色を示し、白人の保守派はエスニック博物館の「乱立」を博物館の「バルカン化」として懸念を表明した。

とはいえ、先住民とアフリカ系アメリカ人がそれぞれ推した国立エスニック博物館の設立法案は、その後、異なる展開を見せた。その要因として、両集団の連邦政府との歴史的・法的な関係の相違に加え、物理的な制約や時代状況の影響があった。特に、国立博物館を建設する際には建設地確保の問題が連邦議会での手続き上の問題などと共に、博物館の設立法案の審議を左右しうることが本研究によって示された。そして、博物館推進者が、そうした諸条件や時代情勢に恵まれ（あるいは好機を的確に捉え）、差別を強いられた過去の記憶を博物館建設に沿うように再構築してアメリカ世論に訴えることに成功した時、博物館設立への支持が拡大し、課題の打開策も打ち出され、設立法案の成立に結びついたと言えるだろう。

最後に、国立エスニック博物館の意義について述べたい。まず、国立エスニック博物館の建設は、マイノリティ集団にとって、20

世紀半ばまでは白人主流派が一方向的に構築した賞賛型の「国民物語」に批判を呈する場の確保することになる。そのため、分離主義的で、アメリカ社会の分裂を助長すると危惧する保守派もいる。しかしながら、国立博物館である以上、国立アメリカ・インディアン博物館と国立アフリカ系アメリカ人歴史文化博物館は、自らの集団についてのみを語る場としてではなく、それぞれ立場から「国民物語」を語り直す場として位置づけられている。マイノリティの過去、現在、そして未来を、多くの人々が納得する形で「国民物語」として語ることは容易ではないが、こうした国立エスニック博物館による試みは、博物館の「対話の場」としての機能を促進するものと思われる。その意味において、国立エスニック博物館は民主的な記憶の再構築を促す「装置」としての役割を十二分に果たしうる博物館である。さらには、アメリカ・インディアン博物館の建設が人骨返還に寄与したように、社会的正義を促すエージェントとしての役割においても、国立エスニック博物館は他の博物館を主導する存在であり、多文化共生社会実現には不可欠な文化施設であると言えるだろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

落合明子、国立アメリカ・インディアン博物館設立法成立の背景 国立黒人博物館設立法案との比較から、GR同志社大学グローバル地域文化学会紀要、査読有、No. 6、2016年、pp. 37-65、<https://doors.doshisha.ac.jp/duar/repository/ir/22845/052000060003.pdf>

〔学会発表〕(計2件)

落合明子、「新アポリシヨニスト時代」の奴隷制博物館 ISM を事例に、同志社大学人文研究所第13研究例会、2016年3月1日、同志社大学

落合明子、大森一輝著『アフリカ系アメリカ人という困難 奴隷解放後の黒人知識人と「人種」』（彩流社）に対するコメント、日本アメリカ史学会12月例会（第31回例会）、2014年12月13日、亜細亜大学

〔図書〕(計2件)

落合明子、ジョン・ブラウンの「動く砦」 記憶の変遷とその展示を巡って、松本昇・高橋勤・君塚淳一、金星堂、ジョン・ブラウンの屍を越えて 南北戦争とその時代、2016年、356(277~298)

落合明子、国立エスニック博物館 国家の中心でマイノリティが『アメリカ』を語るディレンマ、明石紀雄監修、大類

久恵・落合明子・赤尾千波編著、明石書店、新時代アメリカを知るための60章、2013年、284(240~243)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

落合 明子 (OCHIAI Akiko)

同志社大学・グローバル地域文化学部・教授

研究者番号：30264831